

【講演要旨】

東京のエスニック空間と多文化共生に関する 高校生への授業実践

谷口（永田） 博香

I はじめに

私が勤める麻布中学校・高等学校は、東京都港区に位置する中高一貫の男子校である。本校では、いわゆる「総合的な学習の時間」として、高校1・2年生を対象に「教養総合」という特別授業を週に2時間開講している。生徒は、各教員が自分の趣味や専攻を活かして設ける講座から、それぞれ興味や関心のある授業を選択する。講座は1学期間のものであれば、1・2学期通期、通年などさまざまであり、学年や既成の枠にとらわれない自由な授業実践が可能である。私自身は大学時に外国にルーツを持つ子供たちにとっての「場所 (Place)」,そして大学院時には在日Bangladesh人に関する研究を行っていたことから、在日外国人および東京にあるエスニック空間を題材として授業を実践してきた。

港区には82もの大使館¹⁾があり、六本木や赤坂など多くの外資系企業が集積する。生徒たちは外国人の多い環境で日常を過ごしているものの、東京に多くのエスニック空間があることにあまり気づいていない。そこで、①身近な都市を訪れ、在日外国人がどのような生活圏を形成しているのか、その戦略と実態を見ることにより、日本社会を相対化し、見つめなおす。②また、彼/彼女らとどのように共生していくことができるのかを考える。以上のような目標から授業を展開した。

以下に講座スケジュールの一例を示す。

- 第1回 オリエンテーション～「日本人」と「外国人」～
- 第2回 東京における外国人のセグリゲーション、エスニック空間とは（新大久保の場合）
- 第3回 新大久保での巡検
- 第4回 新大久保振り返り
- 第5回 難民と在日ミャンマー人に関するDVD鑑賞
- 第6回 高田馬場での巡検と在日ミャンマー人へのインタビュー
- 第7回 高田馬場振り返り、外国人との共生と今後の課題

表1 「日本人」とは何によって規定されるか？

規定されると考えるもの	人数
国籍	1
血	8
出生地と育ち（どこで教育を受けたか）	0
言語	3
税金を払っているか	0
生活習慣（玄関で靴を脱ぐ、箸を使えるかどうかなど）	1
「日本人」がメダルを取った時に一緒に喜べるかどうか	1
容姿	3
だしの味がわかるかどうか	0

(2016年度3学期の場合。規定すると考えるものを複数挙げてもらい、最も重要だと考えるものに挙手させた)

表2 「エスニック」料理に関するイメージ

エスニック料理である	どちらとも言えない	エスニック料理でない
フォー パエリア ビビンバ ケバブ	ハンバーガー カレー	イタリアン フランス料理

(2016年度3学期の場合)

II 授業の展開と生徒の反応

まず第1回では生徒に「日本人」とは誰か？「エスニック」とは何か？という質問を投げかけている。さまざまな答えが返ってくるが、大別すると「日本人」は①国籍、②血統、③生活文化などによって決まるとの回答が多かった。「エスニック」という言葉に対しては、「途上国（のイメージ）」というややバイアスのかかった見方をしているようで、自分たちでも「偏見じゃん」などと互いに話す様子が見られた（表1, 2）。そこで、日本では自分たち「日本人」がマジョリティであるという感覚がなかなかぬぐえないが、「日本人」も場所が変われば一つのマイノリティ集団、そして一つのエスニック集団に過ぎないということを伝えている。

第3回と第6回では、新大久保ならびに高田馬場におけるフィールドワークを取り入れている。新大久保は日韓ワールドカップなどにより2000年代以降「コリアタウン」としてのイメージが強まったが、近年は韓国に加え、ベトナムやネパール、タイなどからのニューカマーが店を構えており、多国籍タウンとなりつつある（写真1）。



写真1 新大久保の店舗
(2018年 筆者撮影)



写真2 高田馬場の雑居ビル
(2017年 筆者撮影。11階建てのビルに10店舗以上のミャンマー関連の店が入る。ゴミ出しマナーもミャンマー文字で書かれている)



写真3 発表の様子
(2018年 筆者撮影)



写真4 竖琴に触らせてもらう生徒の様子
(2019年 JMCCホームページより引用)

一方高田馬場は、軍事政権の弾圧から逃れたミャンマー難民たちのコミュニティが、西武新宿線の中井駅周辺から移動してきたことで、「リトルヤンゴン」と呼ばれる街になった。背景としては、入国管理局からの摘発を避けたり、交通の便が良い場所を求めたり、すでに高田馬場周辺に居住していたミャンマー人を頼ったりしたことが考えられている²⁾ (写真2)。

第3回の新大久保では、山手線の新大久保駅を中心に七つの地域に分け、グループごとに各地域のエスニック系施設の国籍と業種を調査し、地図上にプロットさせている。その際、Googleマップの一機能であるマイマップを利用し、アカウントを共有して1枚の地図を作成する。調査の際は、写真1のように、看板の言語や国旗、外装などを中心に「可視化された」情報から判断させている。また、次回に各地域での印象をグループごとに発表させ、情報を共有している(写真3)。それらを踏まえ、①彼らは何のために自らのエスニックな要素を前面に出しているのだろうか？、②多くのエスニックビジネスが集積し、可視化されたエスニック空間に対して、「目に見えづらい」エスニック空間が存在するのだろうか？、といった新たな問題提起を行い、高田馬場との対比につなげている。

第6回の高田馬場では、2002年に設立された日本ミャンマー・カルチャーセンター(以下JMCC)の理事長であるマヘーマー氏とその夫の落合氏を中心にお話を聞かせていただいている。JMCCは日本人や日本で生まれ育ったミャンマー人子女へのミャンマー語の指導や、ミャンマー人の生活支援など幅広い活動を行っているNPO団体で、たびたびメディアでも紹介されている³⁾。この地域には2003年に移転し、以来重要なコミュニティの中心となっている。事前に『異国に生きる』(土井敏邦監督、2012年公開)という在日ミャンマー人に関するドキュメンタリー映画を見せているものの、知識が乏しい生徒たち(学校の授業でミャンマーについて時間をかけて扱うことができない点は申し訳ないが)に対し、毎回丁寧にミャン

マーの実情や在日ミャンマー人たちの抱える問題について教えていただいている。生徒も良い刺激を得られるようで、大変貴重な時間となっている（写真4）。以下は、生徒から得られた感想の一部である。

僕が特に心に残った話は日本に来てミャンマー人としての自分より日本人であろうとしてしまう子供の話です。まず僕はそのようなことが起きるとは想像もしていなかったし、そのせいで親子で距離ができてしまうのはとても悲しいことだと思いました。また、民族というものはどんなことがあってもアイデンティティを失わず、違う文化の人がいても共生し合おうと思っていた僕にとって考えが変わる興味深いものでした。そして改めて民族間の共生は難しいものだと思えました。

…またマヘーマーさん、落合さんのお二人がおっしゃっていたことで一番印象深いのが、「軍事政権の時代は不便だったが、今より良かったといえる点もあった」というお話だ。「不便で抑圧されていた分、互助や連帯の意識は今より強かったように思われる」というのを伺って、単純な二項対立では語れない時代の変化について思いを巡らせることができた。恥ずかしながら「軍事政権下の時代は全てにおいて今より酷い時代だった」というイメージを勝手に持っていた自分としては、この話は衝撃的でもあったが、不思議と凄く納得のいくものであった。

しかし、高田馬場にミャンマー人のコミュニティがあることは一見ただけではわかりづらく、新大久保と比較すると非常に「見えにくい」街である。

最終回ではまとめとして、上記の違いが生まれる理由と、日本には多くの「エスニック集団」が存在するが、マジョリティである「日本人」と共生はできているのか？（する必要はある？するとしたら足りないものは？どうすれば良いのか？）という質問を中心に、各人からの意見を交換している。

まず、新大久保と高田馬場の違いについては、限られた時間であり知識が十分ではないとはいえ、生徒からは「コミュニティの性質の違い」に注目した答えが多く聞かれた（表3）。

また、「日本人」との共生については、各学期の受講者の特質にもよるが、生徒の大半は「共生できていない」「共生できているとしても部分的なものにとどまる」という意見が大半である。以下、2016年度3学期に出た意見の一部を紹介したい。

表3 なぜ新大久保の「コリアタウン」は見えやすく、高田馬場の「ミャンマータウン」は見えづらいのか？

意見の例
<ul style="list-style-type: none"> ・コリアタウンは日本人向け。商業的な側面 ・ミャンマーは内輪。ミャンマー人にとっての生活に必須なもの売っている。 ・人数の問題 ・高田馬場は雑居ビルが多いし目立てない。 ・コリアタウンに住んでいるひとは2世・3世が多い。ミャンマー人は1世が多いから、なじんでいない。 ・ミャンマー人は帰国を多少前提にしている。 ・韓国・中国は文化的に近い。すぐ帰れる。ミャンマーはちょっと遠い。
(2016年度3学期, 2018年度1学期, 同2学期の実践より抜粋)

日本人と他の集団の経済状況が違いすぎて、共生するのが難しい。法的立場の違い。格差が拡大再生産。共生に向かおうにも乖離。外国人に教育の場を与えるなどの工夫が必要。

共生できていない。朝鮮学校など、メディアでの「国」へのマイナスイメージが、日本国内にいるエスニック集団に向けられる。教育機関でも言わないから知る機会がない。中1「世界」⁴⁾ みたいに世界の文化を知る機会を作る必要がある。

そもそもエスニックという言葉が少数集団に対して見下しているイメージ。対等にお互いを理解できていない。他国の文化が仏教などの文化を破壊することもあるから、先入観をなくすべき。

日本人という概念から見直すべき。日本語は少数派の言語で今後増える見込みなし。共存はできるけど、共生はできない。

また、現状を知った結果、以下のような意見も聞かれた。以下2018年度第3学期に出た意見の一部を紹介する。

「多文化共生」には何種類もある。移民がバイトに溶け込むのもそうだし、同胞どうしのコミュニティを保っているのもそう。正直言って、勝手にやりたい人が勝手にやってくれ、という感じ。

(前提として) 融合=共生ではない。融合は無理。日本における在日外国人も融合したいと思っていないと思う。共生よりは共存ということだと考えると、Win-winな共存はできていると思う。ただし、多くの人はいそいそで求めていない。自分たちのアイデンティティをなるべくなくさない方向で、つぶし合わないのがギリギリの理想形。

現状に問題を感じつつも、「多文化共生」が理想であり、そのために努力をしなければならないといった理想主義を掲げる生徒は少なかった。むしろ現実的に考えるのであれば、やりたい人たちによる部分的な「共生」しかない、地域社会にエスニック集団が貢献していないので部分的「共生」にとどまる、そもそも「共存」が限界ではないかといった意見も聞かれた。いわゆる教科書通りの答えを言う「良い子」ばかりではない、本校の生徒らしいといえらばしいまとめ方である。ここが本校の生徒の面白さであり、議論のしがいがある部分でもある。

Ⅲ おわりに

多文化社会に生きるということは、自己や自文化を相対化し、自分たちの身近な生活圏にいるマイノリティ集団に目を向けてみることである。授業担当者としては、生徒自身が、同じ社会にいながらもほとんど知らなかった人々と触れ合い、実情を生で見たこと自体が重要な機会になったと考えている。以下は生徒たちから授業後に受け取った感想の一部である。私自身もこうした声が自身の教育実践の原動力になっている。

新大久保での巡検が終わった後から、街中でエスニック系施設を探しながら歩くようになり、こんな所にこんな店があったのかと新たな発見をすることができて楽しいです。また、テレビ等で、外国人のことについての話題(ロヒンギャとか改正入管法とか)をしていると、今までは特に興味を持っていなかったが、注意深く聞き、考えるようになりました。さらに、エスニック集団の人と直接話すのは初めてだったので、情報で知ることと生の声を聴いて知ることの差を実感できました。将来的に、今回感じたことや考えたことを、何かに生かしたいです。

僕は新大久保や高田馬場などの街に行くのが純粋に楽

しそうだと思ってこの講座をとったが、学んだことは想像以上に多かった。特にJMCCを訪れた際にお話しして頂いた、「異文化を完全に理解するのは不可能であるが、異文化を知ることは大切である」という趣旨の言葉に強く感銘を受けた。日本社会において日本人とエスニック集団が共生するための活動の一つとして、今後、僕はエスニック系の施設に行ったり、エスニック系の食べ物を食べたり、社会問題について考えたりして、異文化を知る努力をしていきたいと思う。

生徒から出た意見を通した気づきも多く、こうした講座を持てたことは大変ありがたかった。生徒たちがこの講座で得た知見を活かして社会で活躍していくことを期待しつつ、引き続き積極的な授業実践を行っていきたい。

注

- 1) 2014年8月20日時点の港区公式ホームページ「統計で見る港区6 『82』」より。 <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouhou/kuse/koho/toukei/toukei06.html> (最終閲覧日: 2019年7月30日)
- 2) JMCCでの開取りによる。
- 3) 日本ミャンマー・カルチャーセンターホームページより。なお、本校の授業実践に関する報告がホームページに掲載されているので、ぜひそちらもご参照いただきたい。
<https://jmcc.jp/>, <https://jmcc.jp/news/azabu20190119/>, <https://jmcc.jp/news/20180609-2/> (最終閲覧日: 2019年7月30日)
- 4) 地理や世界史を融合した横断的な授業を行う、本校独自の科目である。

たにぐち (ながた)・ひろか (61期卒)
麻布中学校・高等学校

Example of Teaching of Ethnic Space in Tokyo and Multicultural Society at a High School

TANIGUCHI (NAGATA) Hiroka (Azabu junior and senior high school)